めに水に飛び込んだんじゃないですか？

T；なかなかいいです。そうかもしれません。でもなぜ，水はつるつるなんですか？（沈黙）

T；冬，ものすごい冷たい水に手を入れたことある人？

T；どんな感じだった。

C；ものすごく冷たくてシビレル感じ……

C；感覚がなくなる感じ……

C；痛いような，チクチクする感じ。

T；よしよし。その通りだ。ものすごく冷たい水にはトゲがあってというか，カドがあって，皮膚をチクチク刺すような感じなんだ。その水がつるつるしたというのは……？

C；わかった。水がまるくなったということだ。

C；そうだ。わかった。冷たい水が，温かくなったということだ！

T；そうだよ。これを，水ぬるむっていうんだ。《みずはつるつる》というのは，…（以下略）

このように，M氏の場合は，子どもたちの生活実感を多様に引き出したり，テキストに立ち戻ったりしながら，生徒発言を肯定的・共感的に受け止め，子どもたちが安心して発言できる場面を保障して授業を展開していることがわかるであろう。また，それらの発言をきっかけにして生徒たちは，読みの学習への自信もつけ，次の学習への意欲や発展的な構えを見せていることは，授業後の生徒の多くの感想文や別の作品を扱った実践事例などからも読み取ることができるのである。

ただ，M氏のこのような授業の進め方に対して批判がないわけではない。批判の中心は，子どもたちの活発に見える反応も授業者の巧みな技術に誘導された結果であって，作品を自力で読み深めていくための読み方，あるいは読みのセオリーを子どもたちの中にそれほど形成していないのではないかという点にある。(註６）また，自分とは異なる見方や考え方が対立し，衝突し合う中で解釈がさらに深まることが多いはずなのに，その点も避けているのではないのかという疑問も提起されている。一つの作品を媒介にし，互いに学び合うことの難しさと面白さを，もっと豊かに子どもたちに与えるべきではないのか，と言い換えてもよいであろう。各自の考えを積極的に話し合うことで授業の活性化が図れるのではという先の高校生の投書の問題も，実はそこにつながるであろう。

4　おわりに

学習主体の能動性を高め，子どもたちが主体的に活動する授業を創り出す手立てを，いま理科の授業や国語の授業をもとにしながら，二，三考えてみたわけであるが，最後にふれた国語の実践にかかわる課題は，ひとりM氏だけの問題ではないであろう。批判の内容は，学習者の実態や学習能力の把握，学習者の立場に立った教材研究の必要性，あるいは学習内容の系統性や各教科の授業論の比較検討，学習評価の観点や方法上の問題，指導の定式化など，さまざまな課題を含んでいるものである。基礎学力の向上や授業内容の質的改善を図る上で，これらの課題はＩ氏の理科の実践内容の検討と合わせて考察すべきことであろう。

《註》

1．石井順治『子どもが自ら読み味わう文学の授業』明治図書，1995
2．渋谷・高野他編『戦後国語教育実践記録集成・東北編第１巻』明治図書，1995
3．東井義雄『東井義雄著作集　別巻２』明治図書，1976
4．波多野誼余夫編『自己学習能力を育てる』東京大学出版会，1980
5．無着成恭『無着成恭の詩の授業』太郎次郎社，1982
6．拙稿「詩教材の授業方法の検討—無着氏の授業と大西氏の批判を中心に—」福島大学国語学国文学会編『言文』42号所収，1994